

第6分科会 水環境

「都市河川の浄化」

【コーディネーター】

水色舎 代表 佐々木和之

【話題提供者】

① 「ECOKA 委員会の活動—森林と川環境—」

ECOKA 委員会 委員長 田口信義

② 「びわ湖を守る取り組みについて」

野洲市環境基本計画推進会議（自然部会）代表 松沢松治

③ 「寝屋川市域における市民参画・協働の水辺再生」

寝屋川再生ワークショップ/ねや川水辺クラブ 上田豪

【会場】北コミュニティセンターISTA はばたき

佐々木：論点として、①住民や企業主体の水質改善活動に対して、行政がどのように対応・協働すべきか。②河川や水辺に関する市民の関心をどのようにして高め、行動に結びつけるか。がある。②は活動主体と市民の関係である。①は活動主体と行政の関係である。前半は市民との関係、後半を行政との関係で進行する。②は、市民の中には、活動している人（活動主体）と活動していない人がおり、熱心に活動する人とそうでない人と乖離してしまうことがあることから、活動主体と市民の関係という意味合いで使う。分科会テーマは水環境であるが、メインは各主体の関係を扱う。

●話題提供① 田口信義「ECOKA 委員会の活動—森林と川環境—」

住宅地である鹿の台地区は 120ha に 2,700 戸、約 8,000 人が住んでいる。周りをグリーンベルト 12ha が囲んでいる。造成以来 40 年がたち、ジャングル状態となったのが、活動の発端である。「森と花と水の癒しの場にしよう」というスローガンで 90%の整備をしてきた。生

活者といかに関連性をつけるかを考えてきた。四季の花園、森林ウォークができる森林環境の整備、森林の中を流れている川の親水環境づくりを通して、住民同士、住民と緑地環境の関係を高める観点で活動をしてきた。森林環境の整備、遊歩道整備、花を見ながらの森林ウォーク、権谷川の水ウォッチ・水質検査、ホテルのためのビオトープづくり、ちびっこを集めての川の中を歩く活動を通して、住民を「親林：森林に親しむ」「親水：水に親しむ」に誘い、交流を深め、よりよい環境を残したいという思いで活動している。

第6緑地の写真。平成20年2月に整備し、植樹した。今は、コブシ、菜の花、サクラの競演が楽しめる。夏にはヒマワリ、秋にはコスモスが咲き、ノウサギ、鳥の卵に遭遇することがある。

第2緑地の写真。整備をしてこいのぼりが泳いでいる。川沿いに緑地があって、その中に数本の遊歩道をつくって、ところどころに丸太階段を作って歩けるようにしている。これは、今年4月4日の桜交流会で、住民が70名ほど集まっていた。夏のヒマワリ、秋のコスモスの鑑賞会に住民に来てもらい。写真撮影やスケッチなどをし、1か月後に作品の展示会を開

いている。冬には植樹祭、毎年 60～100 本ほど住民を招いて植えている。単に植樹するだけでなく、これは梅だけれど、災害時の災害果樹園の位置づけを持たせたい。3月のウォークでは、伐採した木をシイタケの原木にして、小学校3年生に集まってもらい菌の植え付け体験をしてもらった。2年たつので、今年の秋はシイタケが取れるだろうから、5年生を集めてイベントを行いたい。このような活動を生駒市の市報に「笑顔の仕掛け人」として紹介してもらった。

山田川はカメやコイが泳いでいる穏やかな流れだが、三面張りになっている。中流は竹に囲まれていたが、伐採して見通しがきくようにした。このあたりにホタルを放流している。さらに上流の方で、川の中を歩くイベントをした。

昨年度から権谷川の水質調査をした。山田川の合流直前、川ダムのところ、ホタル放流地点、源流、30戸の生活排水が流れ込むところの5箇所を採水した。源流の水質は良かった。水はきれいだが少し臭う。今後炭素繊維のネットをはったり、竹炭を置いたりして、実験をしたい。源流付近のCODは2.2、山田川の源流が5ぐらいあったので、それに比べると小さい。生活用水が流れてくるので、2倍ぐらいになる。2年前に、3tぐらいの産廃が投棄され、それを市と一緒にきれいにしたが、この影響はないと考えている。ホタル放流地が悪くなっているのは、落ち葉とかの影響が考えられる。川ダムのところは、水が滞留しているの、倍ぐらいの値になっている。窒素の場合は、上流が多くなっている。これは上流にある畑の窒素肥料の影響だと思っている。権谷川のウォッチは、木津川河川レンジャーの先生に指導を受けながら実施している。水を採水して、パックテストで検査した。

ホタルの放流は昨年度だけれど、川のなかにワンドをつくり、カワニナ3kg、ホタルの6齢幼虫を放流した。今年はカワニナのエサの野菜を入れた。これは権谷川の源流に近いところだが、

両サイドに畑があり、窒素成分が多くなった理由と考えている。

川中ウォークは、チラシを自治会の回覧で回してもらい1歳から80歳まで、45名集まった。小さなカニや魚を発見したりして、楽しんだ。

桜交流会の写真。ソメイヨシノの寿命は80年くらいなので、孫の時代にはなくなってしまうことを考えて、ソメイヨシノだけでなく、長寿といわれるオオシマザクラやエドヒガンを植え、数百年後の人に、我々の活動に思いをさせてもらいたい。そう思ったのは、奈良で桜の名所として有名な佐保川で、川路なにがしが植えた川路桜といっているが、160年前に奈良奉行がこのあたり一帯に数千本の桜を植えた。それが今4本ぐらいいし残っていない。これは法隆寺の樹齢700年の老木である。これを見たこともそういう思いを強くした。

最後にアユの話をする。大阪湾で冬を過ごし、若鮎になってからさかのぼって、三川に分かれるが、三川合流の橋の上で、アユのカウントをした。木津川が一番多い。卵を産むのは木津川の上流のところ。山田川はロケーションとしてはそんなに悪くない。おまけにアユが生息できる水質のレベルである。山田川はもうちょっとがんばらないといけない。メンバーの中にはアユの稚魚を放流したらいいという意見がある。7年の活動として、広大な緑地の85%以上を整備した。

#### ●話題提供② 松沢松治「びわ湖を守る取り組みについて」

私は琵琶湖で50年余り漁師をしている。今も現役で、今日も朝3時ごろから湖にでて、ここに来ている。私が漁師を始めたころは、琵琶湖はとてもきれいだった。40年ほど前から様変わりし、心を痛めてきた。そんな中から環境問題に取り組むようになった。私が住んでいるところは野洲市で、発表する活動の川は家棟川である。一級河川でありながら、源流が野洲市、

河口も野洲市で、珍しい川である。

活動に取り組むようになったきっかけは、家棟川に非常に多くのごみが流れてくるようになったこと。河口部分には、不法投棄、電気屋のように洗濯機・冷蔵庫なんでもあった。漁師の仲間で、何年もごみ拾いをしていた。そんな中、みな高齢になってくるし、何年やっても埒が明かない。何か考えないといけないということになり、「家棟川観光船」を考えた。家棟川のごみはすべて地元の野洲市のごみである。野洲市の自治会、子ども会、婦人会の人に船に乗ってもらい、もう一度川の良さを知っていただき、ごみを減らそうと考え、観光船を立ち上げた。

平成4年ごろに、市町村合併を機会に環境基本計画を作ろうという行政側からの話があった。前のものは、専門家に任せてきれいなものが多かった。そんな中、きれいな冊子ではなく、地元の者が山から湖まで田んぼも含めて、農業、林業、漁業みんなで作ろうという提案があった。2年間かけて作った。作ったのは良いが、冊子を作っただけでは何にも良くならない。当時環境基本計画に携わったワークショップ参加者に、「冊子ができても逃げたらあかん」と言ってやってきた。でき上がってから、各出身地の分野、山の人、川の人、田んぼの人は田んぼと、各分野からいろんなプロジェクトを持ち上げてきた。持ち上げた人は責任をもって推進しようという話になって、環境基本計画推進会議を任意で立ち上げた。その代表になり、今も懲りずにやっている。推進会議は各分野に分かれているが、川を通じて山から湖まで連携しているので、お互いに連携しながら活動をしている。

代掻きが始まると、川は茶色になる。10kmある川だが、5kmから上流は1年中きれい。田園に入るとまっ茶色に変わるのが現状で、琵琶湖の周辺の川はこんな状況である。40年前はきれいだった。田植えの時期は当時も同じだ

った。しかし昔の濁り（赤みがかかった茶色）と今の濁り（白っぽい、沈みにくい）は違う。一旦濁ったら澄まない。昔の濁りは3日もしたら澄んできた。推測するに、田んぼで代掻きをする機械が大型になり、重くなった。高速でかき回された田んぼは、ぺたぺた砂みたいに硬くなっている。昔は耕運機で耕したので、ごろごろの土であった。粒子が細かくなったのが濁りとしてでてきたのではないか。琵琶湖が1年中白っぽくなった。

当時は、琵琶湖の周辺はすべて水路が縦横に張り巡らされていた。どこに行くにも船だった。牛も船に乗せて田んぼに行った。ところどころ田圃道に橋が架かっているが、橋は向こうからこっちへ引きずり出して、船が通っていく。また、もとに戻す。これが暗黙の了解であった。だれかが橋を元に戻すのを忘れて、向こうに渡れない。この時期は水を大事にしていた。水がなければ、田んぼにも行けない。生活用水も川の水だった。学校から帰ると、一番にバケツで水を運ぶのが仕事だった。1965年から圃場整備が始まった。今はバブルをひねったら、田んぼに水が入る。家に帰ったら、蛇口をひねったら水がでてくる。

住んでいる人間は同じなのに、水を大事にしてきた時は、川にごみを捨てる人は誰もいなかった。藻が生えてくると誰かがとっていた。川を護ってきていた。そんな川だったので、夏には子どもが泳いだし、色んなことに使えた。ところが、川の水がいらなくなった。水路は琵琶湖に向けて一直線の水路が変わった。同じ人なのに、水路となると、いらなくなった水が流れる道、排水路となる。特に「排」がつくと、汚いイメージがして、そこにごみを捨てる。それから、どんどんごみがすてられるようになった。また、悪いことに、排水路は一直線で傾斜がついて、すたとごみが流れるので、捨てたらすぐに目の前から消えてしまう。琵琶湖にごみがどっと溜まるようになった。

1970年から75年にかけて、琵琶湖総合開発が国家プロジェクトとして打ち出された。反対運動をしたが、高度成長で人口が増え中、水をどうするのかという話になった。琵琶湖の水位をかさ上げするため、昭和50年から湖の周囲に堤防が築かれた。琵琶湖は白砂青松といわれていたところ以外は、全部ヨシ帯であった。琵琶の形は、何万年前から琵琶の形で崩れていない。ヨシの作用として、水をきれいにする働きがあるが、琵琶の形をまもってきたのがヨシである。総合開発で土盛りがされてヨシ帯がなくなった。その代わりに10mぐらいの鉄板の矢板を打って、コンクリートで固めた。しかし、あれから40年たつが、あれだけの工事をした護岸は、今崩れてきている。そのまま残っているところはまずない。でもヨシは何千年もそのまま残っている。ヨシは台風が来て家が壊れるほどの波が立っても、壊れない。我々はヨシを大事にしてきた。ヨシを壊したら、琵琶湖が壊れるというのが、漁師の思いである。

そうはいってもなくなったものはしょうがない。なんとかヨシを復活させたいということで、まずは小学校に行き、子どもにヨシが大事だと教え、ヨシをポットに植えて校庭で秋まで育てることをやっている。秋の植え替えでは、200人から250人ぐらいの人が植えている。琵琶湖は水位の高低差が激しく、雨が降ったら40cm程度は水が上がってくる。波の力が強く、ヨシを育てるのは難しい。そういうことを繰り返しながら、10年ぐらいやってきて、ここまできた。めげずに毎年同じようなことをやっている。

森林組合の人と交流しようと山に行ったら、「山はもっと大変だ」という話を聞いた。山のお手伝いに漁師が植樹に行く、そこに市民や企業を巻き込みたいということで、「漁民の森づくり」というネーミングで実施したところ、多くの市民が参加してくれた。これも10年やっている。この頃は企業も多く参画してくれてい

る。この頃は企業が植える場所を取り合っている。最近では声をかけなくても企業からヨシを植えたいという話がある。

琵琶湖については、10年間多くの人を巻き込みながらやってきているが、まだまだ琵琶湖はきれいになっていない。汚れの0スタートに立ちたいが、まだマイナスである。行政の意見と漁師の意見とはものすごく食い違っている。漁師は網の汚れをみて言っている。年年、汚れが加速している。今年もひどい。定置網をやっていると、大体1ヶ月か2ヶ月もつ網が、10日でむしろ状態になる。この話をしていると、まだ2時間ぐらい話すことになるので、ここでやめておく。

### ●話題提供③ 上田豪「寝屋川市域における市民参画・協働の水辺再生」

寝屋川市は京都大阪の中間、淀川の中流域に位置し、東部の丘陵地を除いて平坦な淀川のデルタ地帯である。市中心部を流れる寝屋川は、すべてコンクリート、矢板護岸で、市域北西部で接する淀川は河川公園としてブロック護岸されている。縦横に走る市内水路は、公共下水道雨水幹線に位置づけられ、暗渠や二面三面コンクリートになっている。保育所が充実し、子育て世代に人気があったが、子育てが終わると環境のいい隣接市へ引っ越す通過都市であった。高度成長の時に住宅を購入した人は、第二の故郷として定住し始めている。

14年前に市民主体のワークショップで寝屋川再生プランを策定し、さらにそのプランの実現のために、ねや川水辺クラブを誕生させた。活発な市民活動を展開し、寝屋川せせらぎ公園などの水辺再生につなげてきた市民の関わりを紹介し、まちづくりにおける市民と行政の関係のあり方をさぐる。

寝屋川はかつて全国水質ワースト1、おまけに急激な開発で水害に悩まされ、コンクリートと矢板、フェンスで囲まれ、市民から遠い存在

であった。平成13年、市制50周年を機に、忘れられた川を市のシンボルにふさわしい自然豊かで市民に親しまれる川に再生すべく、市民協働による取り組みが始まった。委員を募集したところ、30名の定員に61名が手を挙げた。市は広く市民の参画を得るため、全員を委員に委嘱、前代未聞の公募委員のみによるワークショップが発足した。委員はあらゆる階層の老若男女で、女性25%、学生25%、河川工学から生き物の専門家、市民団体、退職者、現役の会社員、子育て中のお母さんも。団体役員は本音を引き出すため、一個人としての参加である。ワークショップでは、夢を語ったり議論をするだけではだめと、フィールドに出て、自分たちの目で川を検証し、1年間議論を重ね、平成14年に年全体計画と重点整備箇所、市民の果たす役割等からなる寝屋川再生プランを提案、初めての市民主体によるまちづくり計画が策定された。

計画策定で終わらなかったのが、このワークショップ。自ら提案した再生プランの実現には、市民合意と再生への機運を高めることが必要と、ねや川水辺クラブを誕生させ、多彩な活動を行った。それまで指をくわえて傍観せざるを得なかったまちづくりに参画し、得た感動と充実感は彼らを次なる行動へ駆り立てた。自己決定がやる気を生む。これがこの活動キーワードである。

クリーンリバー作戦の写真。胸まである胴長靴をはき、ボートを持ち出しての清掃活動。ポスター作製から配布、12か所もの清掃拠点へののぼりの設置、2段梯子や一輪車などは前もって市民が配置する。春・秋の2回、400人規模で一斉に展開され、月例清掃、淀川清掃も含め、年間1,700人台まで増えている。動員なし、全員自主参加が特徴である。

舟下りの写真。寝屋川のかつての川文化、野崎まいりの再現である。旧淀川、天満橋まで27Kmを公募市民130人とともに下った。

生き物調査の写真。典型的な都市河川、稚魚が少なく、生き物が生まれ育つ環境にないことが明らかになった。

特に重要なのが、源流ハイキング。遊水機能のあった田んぼを埋め、保水効果のあった丘を削って立てた家に住み、多くの水を使って生活する私たち一人ひとりが、深く掘られ、直線化・コンクリート化し、河口堰やダムのある川の現状を生んだ一方の当事者であることを気づいてもらう。

こんな活動を精力的に展開し、府、市によるプラン実現化のための設計ワークショップの開催、水辺空間の実現につなげてきた。コンセプトは「生き物にも人にも魅力ある空間」である。ワークショップでは、基本設計から実施設計、工事施工段階でも、4年に及ぶキャッチボールを行い、事業進捗の中で出てくる新たな問題の解決策の提案や変更協議なども行うなど、徹底した市民参加で進めた。

寝屋川せせらぎ公園では、生き物を育む空石積護岸、瀬やワンド、マコモやセリ、コナラやリョウブなど流域の野草も植えた。船着き場や珍しい沈下橋、風力発電装置もある。こうして生まれ変わったこの場所は、ウナギやテナガエビ、アユも捕獲されるなど、生き物にも魅力ある空間を実現した。市民による様々な活用もある。特に、都市河川における癒し効果を活かした統合失調患者のケアプランへの活用など新しい試みが行われ、人にも魅力ある空間を実現している。半世紀ぶりに川ガキも戻った。

しかし、このような川づくりは委員や水辺クラブ中心で行っても、ただの好きものの活動になりがちである。そこで新しい試みを始めた。それは理念先行型、しかし流域や町全治でものごとを考える市民・市民活動団体と、個別利害に囚われがちだが地域のことを一番知っている地元住民が連携し、原則前例主義の行政も同じテーブルで議論し、お互いの欠点を補いながら進める川づくりである。

平成 21 年に実現した幸町公園の整備では、市民住民の活動のほかに、子どもたちの活動も見逃せない。平成 13 年に再生ワークショップで川づくりの議論が始まったころ、学校では各地区の宝ものを見出す総合学習の取り組みが始まっていた。幸町グループは寝屋川を宝と決めた。チーム名は「幸いスペシャル探検隊」、別名「川のいきものを守ろうチーム」である。子どもたちにとって、親や先生から危険と言われ、護岸の上から眺めるしかなかった未知の空間に、学習と称して、足を踏み入れることができる探検そのものであった。生き物調査から始め、魚はいるがごみが多いこの川の生き物を守らないといけないと、クリーン作戦に臨んだ。真夏に重装備で汗だくだが、自分たちで話し合い決めた行動は、しんどくても楽しいことこの上ない。14 年前の夏、子どもたちが日ごろから気になっていた場所での遊びが実現し、寝屋川再生という地域の課題やコミュニティとのつながりを持てた。学校に帰った彼らは、自主的に各クラスを回り、呼びかけ、学年全員参加の川活動が秋に実現した。自治会長も駆け付けた。引き上げたごみを環境フェスタで展示、子どもたちが引き上げたものと知る大人たちは、「今度はわしらも行くで。声かけてや」と、子どもの川活動が再生ワークショップに連動した。平成 17 年には子ども 110 人のワークショップが実現した。探検隊の妹や弟たちが、兄弟が家で楽しそうに話すのを聞いていて、進級して川チームで魚調査、川掃除、ワークショップも経験し、自主的にクラスを回って大規模なワークショップとなった。

幸町公園は平成 21 年 3 月に完成し、子どもたちの歓声が戻った。落差工には魚道を掘り込み、財政悪化を逆手に取り、極力工作物を作らず、大水による形状変化も許容し、川の営みに任せる順応的管理を提案。市民も管理補修などに協力し、育てていくとして、平成 25 年に実現した。昨年の中豪雨と台風で、ワンドも埋

まったが、市民工事で堆積土砂を除去するとともに、川自身の力で排砂するように形状変更を提案し、官民による順応的管理の第一歩を踏み出した。

茨田（まった）樋遺跡公園では、明治の土木遺産ともいえる淀川からの支線跡を復元する取り組みを行っている。淀川の水は生活用水農業用水のライフラインであったが、水道の普及とともに忘れられた用水路となっていた。ここでも理念に走りがちな市民と排他的になりがちな地元住民との熱い議論と連携があった。大規模な市民工事が一番の売りである。淀川にちなむ土木遺産、そのため淀川の源流部を走り回り、間伐し、川石などの資材の調達も行った。植栽作業は地元の年寄りや近所の小学生の定番。地域に必要と思うものを自分たちで決めて、自分たちで作る、まさに平成の川普請である。参加者は 2 年間のべ 75 日 527 人、市工事 327 万円、市民工事 600 万、国工事 3,000 万を引き出した。市民の思いがこもり、愛着がわかないわけではない。昨今のこの場所の管理は高校生。水辺活動はしんどいけれど、高校では見いだせなかった居場所だそうである。

3 年かけて、寝屋川再生プランと対をなす身近な水路の再生プラン、寝屋川水辺整備基本構想の策定も行い、昨年度は 3 つの水路が集まる場所で、地元 3 自治会と協力して市民工事を進めた。自分たちの提案でできた水辺空間は自分たちで育てると、施設点検、清掃、植生モニタリング等の環境管理業務委託もプロポーザル方式で受託している。大水の後は、手が回らない行政に先駆け、地域対応で契約にない作業までやっている。

12 年前に清掃から始めた淀川での活動、外来植物の宝庫と化した砂州やワンドで、失われてしまった自然や文化を取り戻そうとする淀川河川レンジャー活動と連携し、船乗り体験、魚とり、減災活動である。こんな活動が淀川で初めてワークショップで取りまとめた市民提

案をもとに、河川公園を切り下げ、自然の水辺に復元する水辺づくりのモデル地区に選定され、その実現が遡上に上っている。

以上、人と川、人と人との新しい関係をつくる、寝屋川再生ワークショップが示してきた協働の川づくり、まちづくりの手法である。市民の専門性、創意工夫を活かした自然豊かで文化を感じる川づくりが地域コミュニティの復活と地域の活性化をもたらす。公共事業は官が計画し、粛々と工事を進めるのではなく、市民自身の提案が必要である。

市民参加や協働について一番重要なことは、市民の自己決定である。自分が決定に関わったことで愛着がわく。子育てと一緒にある。だから、川育て、まち育てと呼ぶ。ワークショップでは、参加した人の思いや意見は、情報で変化する。むしろ、当初の意見が反映されなくても結論に納得するという形で、合意形成の過程で、主体的に関わることが大切である。それが喜びや感動を生み、行政を身近に感じる瞬間になる。結果が大切なのではなく、結論に到達するまでの過程が大切である。市民が「任せとき」と一肌脱ぐまちづくりにつながる重要なポイントである。それは政策決定権限の市民への配分といえるものである。それがわがまち意識を生む。わがまち意識が本来の公共意識、共同体意識であり、自治意識である。

これまで市民は行政により恩恵を受ける客体であった。だから失敗でもあれば、行政を追求していればよかった。しかし、このような対応だけでは、行政は市民の側に出ない。むしろ、当たり障りのない無難な行動に後退してしまう。そうならないためにも、市民の側も自宅敷地の造成と川の直線化、日常生活における大量消費と河口堰の建設など、魅力が劣化した川の現状など、一方の当事者であることを踏まえて、向き合うことが必要である。行政も市民を対等のパートナーとして、臆することなく、堂々とわたりあえばいい。市民にすべてをまか

され、一点の間違いも許されなかった時代から、共に責任を持ちながら、次の一手を共に考え、新たな展開へと高めていけばいい。そう考えれば、市民参加による川づくりは、行政にとっても、これまで躊躇していた政策施策をすすめるいい機会となる。自己決定がやる気を生む。実現ワールドに入れる。仕事が苦痛でなく、自己実現の場になる。机上では知ることのできない地域の情報や、思いもつかない提案を住民や市民からもたらされるので、地域に見合った満足度の高い業務が行える。その結果、手直しなどの二度手間を避けることができ、財政上の効果も期待できる。

協働の川づくりは、市民行政がお互いに建設的な提案を行いながら、事業を進めることが必要である。結果として、提案に欠陥や不備があった場合には、責任の押し付け合いをするのではなく、みんなで事業を評価し、反省検証の中から、見直し案をまとめるなど、緊張しながらも、お互いを必要とする関係にまで高めていけば理想である。川づくり、まちづくりの場は、官民が緊張のなか、共に鍛えられる自治の学校にもなりうる貴重なステージであり、民度、地域力、行政レベルがアップする。おのずと自助、共助が醸成され、共助の質も高まる。こんな期待を持ちながら、これからも寝屋川のまちから、川づくり・まちづくりを発信していきたい。

#### ●総合討論（前半）

佐々木：この分科会の討論テーマとして、活動主体と市民との関係が提示されている。上田さんの発表で「自己決定がやる気をうむ」ことを強調していただいていたので、松沢さんから、家棟川の観光船など、市民を巻き込むうえで気を付けているポイントがあれば紹介してほしい。

松沢：我々の活動は基本的に市民を巻き込んでやっている。特に子どもをターゲットにしている。川や湖の活動だから必ず親

がついてくる。

佐々木：田口さんの発表のなかで、住民を招いてとか、交流会に回覧板で45人集まったとか、結果が淡々と述べられていた。そう簡単に人が来るものではない。住民を招くとき、どのようなことに留意なさっているのか。工夫しているところを説明してほしい。

田口：住民参加の観点では2つのフェーズがある。我々の活動は、地域をよくしようとする人が一人でも多くなれば地域がよくなるという基本スタンスを持っている。最初のステップは、市民の活動にさらに多くの住民が参加するために自治会と協働してやるが、これに関しては必ずしも成功しているとは限らない。その時の自治会長の意向、興味に大きく左右され、関心のある時は多く参加していただける。2番目のフェーズ、きれいに整備された後に住民と交流をするという観点では、かなり成功していると思う。色んな催し物については、回覧板や口コミでかなり多くの人参加してくれる。意外と、必ずしも整備が進んでいないところ、ワイルドな活動に住民の方は興味があるようだ。いこま会議のテーマのとおりに、我々のところも住宅地であるが、未開なところと一緒に開拓しようという面もある。そういうところをくすぐるアプローチをしたらいい。

佐々木：自治会の会長や行政など、どういう人が関わっているかポイントだと思う。その辺りを上田さんにお伺いしたい。やる気のある人が集まって、計画を立て、よしやるぞとなった時、次に難しくなるのは、地域の方々とどういう接点を持ってやっていくのか。その辺りの工夫はどのようなになさっているのか。

上田：ワークショップを始める前、私が担当

者だったが、その当時意見を持っている方は「どうせ行政のやることだ」と斜に構えていた。環境基本計画などはコンサルが来て作って、作っただけで満足していた。「そういうことはしないから思い通りに言って欲しい。まとめたいと思うならやってほしい」という話をしたら、いろんな団体の人に来てくれた。ただ、団体の意見は言うな、あんたの意見を言えと。まとまらないなと思っていたが、それぞれ持ち場があって、それぞれがその中で力を発揮することになった。それには、行政の方が、市民が何を言おうとしているのかに対応することが重要で、できないものはできないと言えばよい。「ここまでしかできないからこの間でまとめよう」とすると、やる気のある人はそこでくすぶったまま家に帰り、市民参加をする気にならない。

もう一点、市民と住民の連携の話だが、自分の地域の事ばかり言うのではなく、このメンバーでどういうまちを作れるか考えて欲しいと話した。こんな例もあった。「セリがいっぱいあって嫌だ。アヤメを植えたい。」と言う人がいた。しかし、セリはここにしかない。それならここはセリにして、他の草もちゃんと抜こうということで、地域の資源そのものに気づかない人もたくさんいた。

佐々木：松沢さんのところは、あやめ浜というところで、なかなかのってくれない地域の方ともたくさん喋られたと思う。そういう方とどういう風に話をして、うまく一緒に活動していけるようになさったのか。

松沢：市民の方に自治会や自治センターで環境の話をする、聞いた後は全員賛成で、頑張ろうということで終わる。だが「浜に行き遊ばすよ。山に行き切りま

すよ。みなさん近所誘ってきてください」というと、そこからが動けない。来てと言っても来ないので、最近の家棟川にきれいな船を浮かべて遊覧をやっている。今は、個人ではなく、自治会単位や子ども会を通じて、「魚とりやシジミ採りができる」「昼になったら、シジミの味噌汁も出る」と言いながら、食べ物でつるのが一番である。

佐々木：食の体験は記憶に残る。人が来るとは思わなかったが、実際には多くの人に来てくれたイベントはあるか。

田 口：さきほども言った水辺を歩くイベント。住宅団地に住み自然との関わりが少なくなってきたので、中でもワイルドな活動に興味があるようだ。森林ウォークなど野外の活動に興味があり、それに食がからむとさらにいい。シジミができるかどうかわからないが、参考にさせていただきたい。あえて募集しなくても、活動を見て参画してくれる人が最近増えてきている。最初から多数の人に呼びかけるのは、自治会長の旗振りが大きな影響を及ぼす。

参加者：市民との協働とのことで、いかに興味を持ってもらえるかというところで、面白いやり方をされている。いろんなアイデアが必要だと思う。

参加者：行政から押し付けられるのではなく、市民団体と協力していくのが重要だと分かった。押し付けられたら拒否することもあるだろうし、市民の意見ばかり聞くのも難しいし、活動していく中で関係が生まれるということが事例でよく分かった。

佐々木：例えば食であったり、川の中を歩いてみたりなど住民が参加したくなるきっかけを作り、来て下さった方を活動の中に取組むプロセスになると思う。そのあ

たりの工夫はあるか。

上 田：我々の活動は、個人でやる気のある人が集まってやるものだった。アプローチはそれだけでなく、学校やスポーツ少年団など色々ある。主な活動は、体を動かして外来種をとったり、間伐したりとか、環境そのものをよくする活動である。一度来て面白かったら、続く。もう一つは、家棟川の環境基本計画も感動したのだが、寝屋川といっしょで、自分たちでつくりあげる。自分の言ったことが行政の計画に載っていることが大事なことで、これに得心すると、後々でも来てくれる。来なくてもバックアップしてくれる。行政の計画などできないと思っている人が、提案は持っている。そういう人に来てもらうことも大事である。

松 沢：環境基本計画に関して、住民が寄って作るのが非常に難しかった。本来は1年で何とかしたかったのだが、ワークショップを開いた当初45人来てくれた。地元の企業にも来ていただいた。出来上がるまでは何とかみなついて来てくれた。役所の中にも浸透しなければと、最後に各課から代表者を出してワーキンググループを作った。それが嫌がって2、3か月で潰れた。一番に潰れたのが役所。環境は難しいという思いを持っている。市民の中も、やる気だけである。あれから10年。24のプロジェクトを立ち上げたが、6つのプロジェクトが動いていない。それは、提案した人がいなくなったから。我々がカバーしたらいいという議論も外部からあるが、自分たちが高齢になって一所懸命取り組みをやっている中、人の事を構ってやる余裕がない。提案したら最後まで責任を持ってということをやっていないと、崩れてくる。後継者を作るのが一番難しい。

## ●総合討論（後半）

佐々木：後半のテーマは活動主体と行政の関係で、「住民や企業主体の水質改善活動に対して、行政がどのように対応・協働すべきか」という大きなテーマ。

淀川流域では、河川レンジャーという仕組みがある。淀川水系河川整備計画に、河川レンジャーの充実という項目がある。国土交通省の直轄河川で設置されており、行政と住民の間に介在して、関心をもってもらうような活動や情報の収集などの活動をしている。私が研究した琵琶湖河川レンジャーの場合は、任命権を制度運営委員会が持っている。ここは、住民と学識経験者、行政によって構成されている委員会で、任命された河川レンジャーは、この委員会に対して報告することになっている。他のところでは、河川事務所長が任命しているところもある。

河川レンジャーが行政と連携するためにどんな活動をしているのかを分析した。2年分の活動報告書を読み込み、誰とどんな話をしたのかを一覧表にした。川の中で定期的に木を伐らないと、いろんなものが引っかかって、氾濫の原因になる。そこで木を切るのだが、その木材チップの集積場にカブトムシ幼虫が紛れていた。河川レンジャーは河川事務所と小学校との間を取り持ち、河川事務所が木のチップを運び、小学校に設置した。カブトムシがどこから来たのかというチラシをつくり、カブトムシを通じて、河川で行われている活動を紹介した。2年間情報収集をして、この活動が生まれたのは、かなり後半である。情報収集に2年間かかって、事例を生むことができた。

任命時のネットワークは、実際に事例が生まれる頃には拡大している。事例の中では、情報収集を繰り返していると仕事や課題が見え、行政の人に覚えてもらえる。要望だけだと覚えてもらえない。こういう話をしたら相手に伝わるということがわかってくる。2年間かけて、この人にカブトムシの話をしたらうまくいくということが分かったのだと事例を分析して考えた。カブトムシの幼虫がチップのなかにいるという情報は行政には必要のない情報である。たまたま担当者が気づいたもので、所内で共有する話ではない。担当者しか知らない情報が河川レンジャーに伝わると他のことに活用してもらえる。繰り返し情報収集をすることで、担当者がこの河川レンジャーなら使ってもらえると思ったのだろう。

この事例から2つのことが言える。行政は情報を出さないのではなく住民がどういう情報が欲しいのか分かっていない。住民側もどんな情報を出してもらいたいのか的確に伝える方法を持っていない。2つ目は、何度も情報収集していると、行政から情報が出やすくなるということ。

講演をしていただいた3人の方に、行政と関わる時に留意なさっている点を教えてほしい。

上田：行政は自分の仕事は責任があるので、自分の部署のことには目を光らせる。他の部署の仕事は眠っている。なぜかという、追求されるという形で責任を持たされるからだ。報告はするのだけれど、次を考えない。行政が議員に説明に行くとき、不利な情報はもっていかない。さきほど行政は出さないわけではないと言っていたが、できたら出したくない。

財政が非常に悪いので、余計な仕事に関わってられないのが現状。職員はかわいそうな状況である。

佐々木：市民の側が行政とうまく付き合うコツは何か。先ほどの例だと、頻繁に通って、自分がどういう人なのかを理解してもらい、この人にはこういうことを言えばいいんだとわかってもらうという話をした。

上 田：担当者で行き来して、対話することが一つ。あと、担当部署の所属長に、市民参画の意味を説明する。上司から担当者にはやらなければならないと言ってもらうのが一番大事である。理解してもらうことベース。課の仕事と今やっていることとの関わりを、糸をほぐすように理解してもらう。たまには一杯飲む。

松 沢：余分なことを言っていくと、潰される。関係のある部署は何があってもひっぱり出す。それを徹底してやっている。担当者だけだと動きにくいので、まずは課長に出てきてもらう。昼ごはんも一緒に食べながら、食べ物でつったり、行動を一緒にする。担当者も一緒にまわっていると、気が乗ってくる。嫌と言えないようなつながりをつくる。ただ市民団体と役所の関係だけではうまくいかないのが本音である。

田 口：我々はボランティア団体であるが、機能としては、行政と住民をつないでいる。ある意味、行政サービスの代行ともいえる。河川レンジャーと違うのは、行政に近いかどうかである。助成金を申請して受ける中でコンタクトをとっているの、弱いと思っている。校区単位で、住民の側に立ったボランティア組織があった方がいい。元気な高齢者を使うといい。行政の立場からすると高齢者を使う、我々の方からしたら行政を使うような

仕組みがあればいい。メンバーの中で、行政に比較的近い活動をしている2人の方を紹介する。小宮山さんは生駒市環境基本計画推進会議に参加しており、山田さんは行政とコンタクトをとっている。

小宮山：生駒市の環境基本計画を見直しに参画し、三者協働で始まった段階である。計画段階では住民が結構参加されたが、実施段階になると減った。さらに実行段階に進んだとき、私は竜田川の水質を良くする取り組みをした。植物を使って水質を良くしようという話がまとまった。5年経過したが、結果として、水質は下水道が整備されないとよくなる。下水道の進捗を待つしかない。生駒市が従来から実施しているクリーンキャンペーンは年1回やってきていて、効果が見えてきた。

寝屋川ではなぜ参加する人が多かったのだろうと思う。生駒市では住民の関心が少なかったとしか考えられない。流域の住民に参加してほしいが、現状はほとんどなく残念である。行政の方は、各担当者が出て計画、実施段階までは一緒にやっこられるが、人員削減等がある、我々と付き合いができない。その後は担当者を外して、担当部署という形になって、現実として詳しい人が関わってくれない。上手く一緒にやっこいけない状態である。

山 田：行政と地域住民がどういう関係性にあるかという質問だと思う。私は民間上がりだが、生駒市の行政改革を4年間やってきた。相手も人であり、良い関係性を保つことが結論である。私も週に何回かは、市の関係各課に顔を出している。公務員も3～5年で異動する。若い人も入ってくる。教えてあげたり、教えられた

りそういう関係性を保つ。お金も官民いろいろ制度がある。そういう制度を活用して、地域に愛着を持って、ぶれない信念で続けていくことで、行政も我々も、住民のみなさんも分かってくれる。そういう気持ちで日々活動している。やっぱり、和だと思う。

上 田：行政も市民も本音で話す。怒るときは怒る。良いところはそれなりの評価をする。口で言って表さないと、相手にも分からない。緊張が必要。お金をもって環境を管理しているのは官だったが、それでは進まない。間違っただけはいけないのは、財政的に苦しいから市民を使うのではなく、市民の意見を聞かないと本当の市民の要望が分からないことに気づいてもらわないといけない。現場の人と話をするときには、下の話をするときもある。笑って、そこまで話をすると、お互いが良い人間だと分かり、次の話ができる。生駒市では参加が少ないという話だが、私が保育所に子どもを預けていた時の友人7、8人、みな環境の良いところに引っ越した。このうち2人は生駒に引っ越した。生駒は環境が良いから来ている人がいる。環境が良いからある意味満足している。地域の落差はあると思う。寝屋川がたくさん来たのは、行政の責任で市民をひっぱっていくのではなく、来てくれたら十分というスタンスだったこと。また、丁度そのときコイの集団産卵があったので、それを広報の一面に載せた。情報提供をきちんとして市民の掘り起こしをした。半分は働き掛け、半分は広報を見てくれた。

松 沢：集まってきた人の気持ちは聞いていないが、呼びかけをした。市も県もきれいな冊子を作るが、そういうものを作りたくない。多くの人に来て欲しいと呼びか

けをずっとやってきた。心ある人が寄ってきてくれた。特別なことはない。

中野（野洲市環境課）：行政と市民の方で壁があるような印象を受けている。私はそんなつもりはないのだが、松沢さんといろんな取り組みをさせていただく中で、思っているところは一緒。やり方は違うし、役所の目線で話すこともあるが、目的は同じ方向を向いていけば、進んでいけると思う。市役所の中でもいろいろある、課長や幹部の思いもあるので、動きにくいこともある。

環境課に配属された当初は、色々な活動をされていることを知らなかったことも問題だと思った。取り組み内容の情報発信をし、みなさんに知ってもらい、興味関心のある人に参加してもらえば、もっと広まると思う。それならもっと情報発信せよと言われると思うが、自分なりに考えて動こうと思っている。私も食で釣られた一人。その辺も励みである。

田 口：住宅都市の課題はかなり共有されていると思う。方向性が一致しているのだけど、協働できないのが問題。壁がある・柔軟性がない・自由度がない、それをとっばらわないといけない。高齢化社会に向かって地域のシステムをどう作り上げるのかという活動もしているが、その中で、デマンド交通を取り上げたいと思っても、生駒市は取り上げていない。公共交通に関することは、市が中心になって、大学の先生を集めて協議会設置している。その枠組みを崩して、より住民の意見をきく仕組みを作らないといけない。地域のことを一番知っているのは住民であるから、住民の意見をきく自由度を持った仕組みが、行政サイドに必要。

佐々木：壁という言葉をお二人が使われたが、なんとなく壁を感じるという、その壁と

は何か。

上 田：同じ方向を向いている部分はたくさんある。仕事をそれでやる場合、組織としてどう動くか。行政をどう騙して予算を確保して、どう市民と連携するのかを考えながら、やらざるを得ない。中にいて、それぐらい壁はある。壁を取っ払うためには、ひとつは担当者と行動をともにすること。ワークショップも中に入らないといけない。落とすどころではなく、できるところを提案してくださいという。家に帰って、あなたが市にしてほしいと思うことを、あなたがしてくれればいいのだという。

佐々木：行政の責任が壁になっている。その壁を突破するためには、関係性をつくるところが結論になるのだが、そのあたりから解消する感じか。

上田：それもあがるが、システムとしてやらないといけない。環境基本計画の話にも出てくるが、市の総合計画のときも、必死になってこの一文「ワークショップやる」と入れた。議員も役所の職員もそうだが、自分が一からやるといったら全部説明しないといけない。ところが前から決まっていたら、勝手に動いている。自分の責任ではない。説明しないで済む。そういう意味の責任である。

参加者：壁を崩すために人間関係をつくる。素晴らしいリーダーがお三方いらっしやるので、上手くいっている例だと思う。見方を変えて、基本計画に位置づけられているかどうかが出発点になると思う。ECOKAさんの活動は自治会の活動で、行政とは距離のある活動とおっしゃっていたが、その運動が行政とどう関係を作っていくのか。メンバーの中に見直しの委員が入られたということで、それなりのパイプをお持ちではないか。自治会の

お金だけではやれない。行政の関係をつくるところでは、お金も大きなものがある。助成金の話があったが、それは環境基本計画に位置付けられた事業になっているのか。ベースがどこにあるのか興味がある。

田 口：スタートの時は、自治会傘下なので、自治会から年に10~20万円の助成金をもらった。それだけでは足りないので、市・県・国・民間からの助成金に応募して資金を得て、トータル150万円ぐらい。環境基本計画とは直接の関係はなく、独自でやっている。より住民に近い活動で、ここだけで動いている。これだけでは弱いと思っている。行政とのパイプにしても、個人的なコンタクトもあるが、住民の考えを多く取り入れてもらうために組織を変えてもらうためには、グループ単位で、行政とのコンタクトをとって、グループ対行政という形で意見交換をして、住民がやりたいことを実現するシステムとして取り上げないといけないと思う。個人的な関係でいくのはよくない。

参加者：強い市民力だと実感している。市民の運動があつて、それを環境基本計画に位置づけるような選択、市民参加という仕組み、条例やパブリックコメントなど色々な形に発展すると思う。必ずしも計画に位置付けるのではなく、違った選択肢もある。ベースになるのは強い市民力と実践と歴史、経過だと思う。

田 口：環境基本計画は生駒市全体の計画だけれど、基本計画は細かいところまで目がいっていない。住民がやりたいことは住民が一番よく知っている。それが十分に反映されていない。

佐々木：計画については、松沢さんのところでは、整合性をとりながら、いろんなNPO

と連携しながら活動なさっている。

松 沢：基本的には、基本計画をいつも頭においているわけではなく、ただ琵琶湖をよくする思いでの取り組みが先である。その取り組みが計画に該当しているとアピールしている。

川から流れてくるごみをどうやって止めるか。ごみを出さないでとPRしてもだめ。そういうことから、一人ひとり川の良さを、ごみがある風景を見てもらう活動をやった。3年たったら、不法投棄は完全になくなり、ごみは半減した。老人会、子ども会、婦人会に啓発をしたらごみが減った。続けて行くには、ボランティアだけではだめ。船の集客もある。当初は我々漁師が100万円ほど出して自分らで作ったが、高齢でもあり続けていけない。昨年、他市、他府県にアピールしながら、観光面でお金をいただいて、環境の方をやっていこうとNPOを立ち上げた。

今は緑一色であるが、4月には上流に桜があって、それを桜船といって来られている。秋になると、ヨシが枯れ、マコモも枯れる。ガマがいっぱいある川で、フランクフルトのようになったのを取ってあげている。子どもたちは川遊びを喜ぶ。やっている本人たちは、これが野洲市の環境基本計画だと認識していない。結果的に環境基本計画の推進につながっている。

佐々木：関連して上田さんにお聞きしたい。高校生が現場の責任になっていると伺ったが、そういう人は計画との関係性を認識しているのか。

上 田：実際動いている人は、この計画があるから動くということはない。しかし自分たちの作った計画を具体化しているのを見ていきながら、次々やっている。水

質の話では、きれいになってから頑張るのではなく、汚いからやる、そうしていると予算がつく。大きな予算がつくか否かの判断は、どれだけ多くの市民が頑張っているかである。

佐々木：情報発信どんな形でやっているか。

松 沢：推進会議では2ヶ月に1度市民に発信している。イベントを市の広報に出している。メディアはみんなの関心度が高いので、活用するといいい。

補助金の話が出ているが、国の補助金も行政の補助金も、いただくと後の始末が大変。我々のところには1円も入ってこない。後の始末に倍ぐらの労力がかかる。できることなら、補助金をもらうときは行政を嘔ませておきたい。企業の補助金は一発で入れてくるし、企業の職員も来てくれる。TOTOが近くにあるが、工場長がごみ拾いに毎週来てくれる。すると、社員も来てくれる。そういう補助金は後始末も楽。企業の補助金をいただきにいきたい。

参加者：上田さんは行政マンらしくないところで進んでいく。市から、いろんなものを引き出してくる。行政からすると煙たがったのではない。活動を進める中で、いろんな変わった人がいないと、まっすぐ進みすぎるのもよくないと思う。寝屋川では、高校生が上の人を見て、自分ら思うところをやることになる。それが組織のつながり。変わった人間がたくさんいればいるほどいいし、行政の変わった人が担当になってくれると、その場に長いこと留まってもらえる。

参加者：私も田口委員長の仲間。2年ほどおくられて入った。入った理由は、竹が密集していて散歩していても緑地を見る気になれなかった。きれいにしようと誘われ、竹を切ったら、色んな植物が生えてきた。

きれいにしたことで、利用できるし、楽しいし、うれしい。

佐々木：「食べられる」など、モチベーションが大事。自分たちがやってきて得られることがあるというのが大事だ。



(会場の様子)